



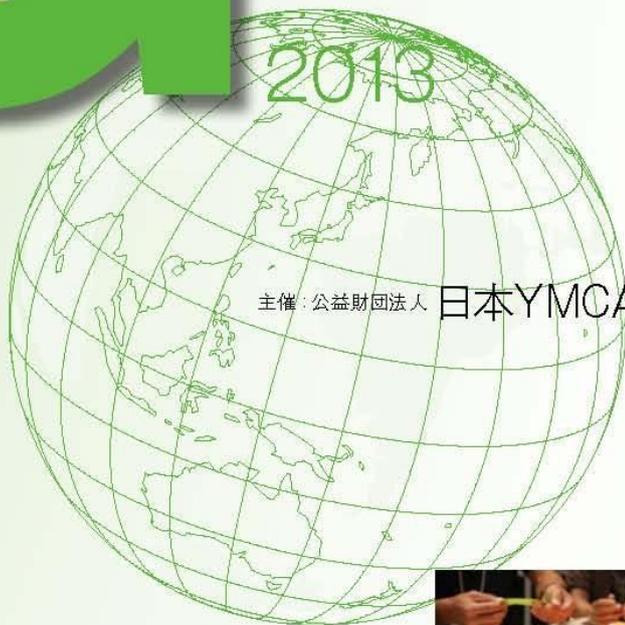
YMCA

地球市民育成プロジェクト

2013 年度報告書



GLOBAL CITIZENSHIP PROJECT



主催：公益財団法人 日本YMCA同盟



YMCAとは



1844年6月、英国・ロンドンで誕生しました。産業革命の過酷な労働環境で働く青年たちが集まり、語り合い、互いの成長と生活改善を求めて活動を始めました。現在は世界119の国と地域で、5800万人が活動するNGO(非営利組織)です。また、1947年から国連経済社会理事会(ECOSOC)の協議資格を有する団体として、青少年教育、人権、女性の地位向上などの分野で国連や赤十字と共働しています。

YMCA地球市民育成プロジェクトが目指すこと

YMCAは「地球市民育成」に取り組み、世界(の人々)と私たちは互いに関わりあっている、つながっているという気づき、そして主体性や責任感、行動力を養っていくことを目的としています。

若者たち自らが変化の担い手として、地球(世界)が抱える深刻な現状と社会への責任を認識し、人権や倫理観を重要視し、あらゆるコミュニティーが正義、平和、持続可能な暮らしに向かうよう働きかける姿勢を目指します。

アジア・太平洋YMCA同盟(2008)
『地球市民に関する東京宣言』より抜粋

目次

YMCAとは.....	1
YMCA地球市民育成プロジェクトが目指すこと.....	1
年間研修の流れ.....	3
リソースパーソン、協力者の声.....	4
地球市民育成プロジェクト第4期生報告.....	5
互いに影響を与える関係を育む-生涯の友に会う-	15
一年をふりかえって、今感じていること.....	18
2013年度報告会、認証授与式.....	19
資料編.....	20
2009年度-2013年度参加者所属(人数).....	20
2013年度夏期研修の様子.....	21
YMCA地球市民育成プロジェクト リソースパーソン.....	29
YMCA地球市民育成プロジェクト協力・支援者メッセージ.....	30

年間研修の流れ

1 | 応募

希望者は、所定の申込み用紙、所属YMCA又は学校の推薦者による推薦書を事務局へ提出。

2 | 選考

書類に基づき、選考

3 | 事前研修

課題図書による文献調査、国内NGOへのインタビュー活動等を通じて見えてきた問題意識や自分の考えをレポートいまとめる。

4 | 事前オリエンテーション

通年プロジェクトを共に創る国内研修生の顔合わせ・交流会、YMCAスタッフによる活動紹介、OB/OGによる相談会等。

5 | 夏期研修

アジア地域のYMCAから約30名のユースも加わり、地球規模課題を学ぶ。変化を起こすアクションプランの立案(原則、英語)

6 | アクションプランに沿った諸活動とレポート提出

アクションプランに沿って活動をすすめます。所属学校やYMCAでの報告活動、自主企画等を行う。また、活動報告をまとめる。

7 | 報告会、認証授与式

活動の成果や経験を持ちより、報告します。これをもって、年間プロジェクトの修了を認める「YMCA地球市民」認証を授与。

地域・世界での 幅広い活躍

アジア・世界各国で行われる国際会議、トレーニング・プログラム、インターンシップなどの機会が拓けます。

リソースパーソン、協力者の声

(リソースパーソン一覧は P29 を参照ください。)



田中治彦さん

上智大学総合人間科学部教授

インターネットの普及やグローバルな経済活動のおかげで私たちは好むと好まざるとに関わらず「世界」とつながって生きています。例えば、毎日のように手にしているケータイの部品は 80 以上の国や地域から来ていますし、あるいは欧州のユーロ危機が日本の若者の就職にすぐに影響するというのが今日の世界の現状です。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災以降、持続可能な生き方とはどのようなものか、本当の豊かさとは何か、これまで以上に問われるようになりました。震災復興や原発事故の収束が遅れる一方で、出来事に対する風化現状も出てきました。3.11 後の世界にあって私

たちはどのようにアクションしたらよいのか考えさせられます。

このプロジェクトは、グローバル化した世界と私たちが何らかの関わりをもつ糸口を見つけ、世界の問題を自分の足許から少しでも解決できる力を身につけることを目的としています。また、YMCA がこれまで行ってきた青少年活動、地域福祉、国際交流などの経験を基に作られています。若者自身が無理なく「自分」と「世界」をつなげて考え、アジアに友人をつくり、共に励ましあいながら、それぞれの地域や団体で今後の活動を展開できることが期待されています。



中村絵乃さん

特定非営利活動法人開発教育協会/DEAR 事務局長

プロジェクトがスタートした時から、ファシリテーターとして関わっています。一週間の生活を共にする中で、目覚ましく成長する若者たちの感受性や行動力に感動させられています。

地球市民育成プロジェクトは、環境・開発・人権・平和などの地球的諸課題に対して、その背景を考え、自分の生活とのつながりに気づき、身近なことから問題解決に関わる力をつけることをねらいとしています。

プロジェクトでは、日本国内やアジアからの研修生と課題や問題意識を共有し、ワークシ

ョップやフィールドワーク、話し合いを通して、理解を深めていきます。多様な意見を持った仲間と議論し、学んだことを分かち合うことで、新たな視点や方向性も見えてきます。アクションプランをつくり、研修後、各現場で実践をしていくことを目指します。

プロジェクトはあくまでも始まりです。これまでもたくさんの研修生が自分にとっての「地球市民」を考え、問題解決に向けて行動を始めています。これからの社会をつくり、変えていくのは、皆さんです。一緒に考え、学び、行動しましょう！

地球市民育成プロジェクト第4期生報告

子ども達一人ひとりがベストな教育を受けられるためには

根本 優

上智大学

私は大学で教育学を専攻し、「子ども」や「教育」に強い関心がある。GCPの夏期研修で世界には様々な境遇に置かれた人がいること、様々な文化が入り交じっていること、日本にも他国の文化を持つ人がいることを学び、アクションプランのテーマにしたいと考えた。

そこで自分の出来ることを探し、見つけたのが「足立インターナショナル・アカデミー(以下、AIA)」での学習ボランティアであった。AIAは足立区およびその周辺に住んでいるダブルや外国人労働者の子どもたちの教育ニーズ(特に日本語教育)や大人(外国人)の識字教育に取り組んでいる。

ボランティアとして参加するようになり、子ども達に学習指導をした。担当した子ども達には、フィリピン国籍の兄弟やアフリカの国籍の子、母子家庭の子などがいた。様々な境遇の中で生きていることを肌で感じることができ、子ども達

へ学習指導から自らも学ぶことが出来た。日本語教育の難しさも感じた。

また、2014年2月に1週間、カンボジアでのツアーに参加した。孤児院での日本語教育ボランティアをし、簡単な日本語授業を行った。どうしたら子ども達に伝わるか考えるきっかけになった。そしてカンボジアで起きた悲しい過去や、人々の暖かさを学ぶことが出来た。

子ども達がベストな教育を受けられるために、私自身、それぞれの子どもが置かれている様々な境遇や背景を知ることがまだまだ必要だと感じる。これからも知る、学ぶ、アクションを積極的に起こし、自分に出来ること、自分しかできないことを見つけていきたい。

これらのアクションを通じて、自分の変化が世界を変える小さなきっかけにつながっていくこと、そして地球市民へ一歩近づいたように思う。

プロジェクト夏期研修で、インドネシアの民族衣装を着る根本さん(左)



子どもたちの笑顔

木村 浩太郎
金沢星稜大学

私はアクションプランとして、①フィリピンにある孤児院等の訪問②大学での講演会の実施③日本の小学校での発表会の実施を立案した。

まず、フィリピンにある孤児院「House of joy」を訪問した。この施設では、親がいない、両親から虐待を受けた、自然災害などの理由で保護された子どもたちに、教育と食事、住む場所を提供している。ここを訪れて教育の重要性を感じた。なぜなら、施設運営者から「様々な理由で傷ついていた子どもたちが、スタッフや子ども同士、学校教育によって傷が癒えていく」とのお話を聞いたからだ。また、子どもたちにインタビューをし、子どもたちは学校が楽しい、学校に通えることを誇りに思っていることを知ったからだ。

また、イスラム教系の小学校を見学した。そのPTA会長から「フィリピンはキリスト教が多数でイスラム教徒は、社会的に差別され易く、それを変えるには、教育を受け学歴を残すしか

ない。」とのお話が印象的だった。

最も印象的だったのは、子どもたちの笑顔である。様々な理由によって、教育の機会不平等は起こるが、子どもに責任はないと改めて実感した。

次に、大学で講演会を実施した。「House of joy」を運営している澤村信哉氏を招き、10月23日金沢星稜大学で講演会を行った。この講演会等の成果として、一人の学生がその後「House of joy」を訪問したり、音楽サークルがチャリティーコンサートを企画し、収益金を寄付できたり少し支援の輪が広がり、世界について考える機会を提供できたと思う。

最後に、金沢市立浅野川小学校にて発表会を行った。小学生たちは、「House of joy」の子ども達が川や井戸を使って頭を洗っている様子や鶏を調理している様子などを真剣に聞いてくれた。その後の質問も多く出て、積極的に知りたいという姿勢が見られた。

金沢市立浅野川小学校での発表会
活動風景



「貧困」に対するアクションプランと考えたこと

樽松 あゆみ

金城学院大学

私は、高校生の時に英語科に所属していて、大学でも、英語を中心に学べる学科に入学した。そして、英語を学ぶため、大学1年生の春休みにフィリピンに短期留学した。そこで、ストリートチルドレンやワーキングチルドレンに遭遇した。先進国では考えられないような世界だった。それから私は、貧困について考えてみたい、特に子どもについて深く考えてみたいと思った。

人々の知識不足や無関心さが貧困を生み出す原因の一つではないだろうかと考え、以下のようなアクションプランを設定した。

まず、自分が貧困について学ぶことだ。本やインターネットで調べてみると5秒に1人、5歳未満児が亡くなっていることを知った。今こうしている内にも、世界のどこかで小さな命が失われているということである。これは、日本に住んでいる限り、想像もつかないような数字である。

次に、海外の人々の考え方を聞くため、インタビューを行った。貧困を解決するために必要

なこととして、貧困の知識と政府の支援が必要という意見が多かった。また子どもの死亡率の認知度は低く、初めて知った人々は「衝撃」と「悲しい」という考えが多かった。そして、貧困に対しては、教育をしっかりとすべきという意見や、愛情が必要など人々の内面的な気持ちに対する意見も寄せられた。

そして、貧困の知識を深めるためにパンフレットを作成した。より若い世代に知ってもらいたいと思い、学習塾にそれを設置した。

最後に、母校にて、高校生への貧困意識に対するセミナー企画を問い合わせた。しかし、開催することが出来なかった。したがって、次なるアクションプランとしたい。

以上から、貧困問題の解決には多くの人々の力が必要で意識を高める必要があること、また国を越えても、貧困に対する考え方は似ていること、今は裕福でも、将来貧しくなる可能性は0ではないという事が分かった。

パンフレットを作成し、学習塾に設置してもらった。



既存のイベントに+αをして、国際との関連性をつけること

須賀 江美
東京 YMCA

例年行われている“Thanks giving day”のイベントに食育という観点から世界の子どもの食事・自分たちの食事について園児と考える機会をプラスするアクションプランを考えた。私の職場である英語幼児園の年間行事を異なる視点から捉え、新しい意味づけを増やすためである。

“Thanks giving day”は建国前のアメリカで、アメリカ先住民が現地の食物や食べ方を教えて、移住者達の飢餓の危機を救った。その後、感謝の気持ちを込めて、先住民族と一緒に食事を共に分かち合ったという説がある。そこから発展して、現代では家族と一緒に食事を共にして日々の糧に感謝をするというアメリカでは根付いたお祝い事となっている。

東京 YMCA の英語幼児園では毎年 11 月、普段は母親に作ってもらっている昼食を、自分たちで準備し、園児全員で分かち合って昼食を共にする行事がある。例年、食事準備・調理

体験に重きが置かれていたが、私はそこに自分の食事を顧みる機会を増やしてはどうかと提案した。『写真でみる世界の人々の食事』(特定非営利活動法人開発教育協会 2010 年発行)を利用し、11 月の 1ヶ月間、世界の食事について考える時間を設けた。園児には細かな数字や現状について伝えることは難しいが、写真という媒体を通して、視覚から情報を与え、各々に感じる事を話してもらった。

また、感謝の気持ちを表すことを目的として、“Prayer flag(感謝の気持ちや願いを旗にして掲げ、祈るといったネパールの習慣)”制作をクラフトの時間に行った。

これらのことから、日常的な活動の中に世界との関連性を持たせ、文化を比較し触れる面白さ・自分の環境に感謝する気持ちを自然と養うことが出来たのではないかと考えている。

(スタッフ)

夏期研修では、ホームグループ・リーダーを務めた。



障がいのある人とない人との共生社会の実現に向けて

岸原 知美
YMCAせとうち

私は共生社会の実現に向けたアクションプランを設定することにした。以前、ある駅前で40代くらいの方が一人でシャボン玉を吹いていて、周囲にいた人の中には、変な顔をしたり、仲間内の罰ゲームとして話しかけようとする人の姿があった。障がいのある人や、その人に関わる人が生活する上で困難さを抱えている場合があると思った。しかし、互いの関わり方や思い方を少し変えるだけで、生活しやすくなるはずだ。

共生を考える時、違いから目を背けることはできない。「同じ人間」ということではなく、互いの違いを認識する取り組みをしたいと考えた。そのために、3つのアクションプランを立てた。

1つ目はなぜ、共生していくことが難しいのか、そもそも、「共生」とはどういうことなのか考えることだ。これらの考えへの土台がなければ具体的に行動することは難しい。2つ目は、関わる機会をつくることだ。関わることで、実際に自分が何を感じ、どう行動できるのか分かる。3つ目

は、理解し合うことだ。それぞれの人がもつ特性への理解だけでなく、その人の気持ちを理解することが大切だと考えた。これらの3つは、常に関係し合っているものである。だから、もうできた、と終わりにするのではなく、繰り返し立ち止まって考えることが必要である。

取り組みの途中ではあるが、見えてきたことが2つある。1つ目は、「共生社会を築こう」と掲げただけでは何も変わらないということだ。一人ひとりが「共生社会」を具体的に描くことが必要である。例えば、関わらないということも、自然な関わりだと思う。人によって、人との関わり方は異なるので、自分にとっての自然な関わり方を目指すべきだ。2つ目は、周りの人と一緒に考え、自分自身の考え方を多様にすることが大切だ。障がいの有無に限らず様々な「自分とは異なるところがある」人々との共生を考えていくことにもつながっていると思う。

(ユースボランティアリーダー)

私のアクションプラン

半澤 七海
東北学院大学

私は、アクションプランという言葉は初めて聞き、たった一人の学生でも、私でも、社会に働きかけてアクションをとることができると思うことができた。だから、「世界の問題」を、いかに「私たちの問題」と思わせることができるか、挑戦してみたいと思った。

私は特に、女性の権利について興味がある。世界では、女性だから教育が受けられないとか、性的奴隷とされているとか、結婚相手を決められている、出世できない、など女性が男性よりもさまざまな場面で行うことが限られていることを知った。私も一人の女性として、限られているなんておかしいと考え、この現状をどうにかできたらと考えるようになった。

日本では、女性は男性よりもチャンスが少ないと感じている人はもしかすると多くはないかもしれない。しかし、他の国ではどうか、これはあたりまえではないと思うことが大切だと思う。なぜなら、次の二つのことについて知ったからである。

一つは、女性の社会進出が進んでいると聞いていたヨーロッパでは、クォーター制度(政治分野で一方の性が他方の4割を下回ってはならないという制度)を採用しており、女性の意見をもっと社会に反映しようとしていることだ。

次に、「デザートフラワー」という映画を観て、FGM(女性器切除)が伝統的文化としておこな

われている地域があると知ったことだ。男性割礼が行われている地域もあるが、このFGMには医学的利点はなく、女性の処女性を守りたいという理由からであり、女性もこれに苦しんでいるが何もすることができないと知った。

これらについて、大学の授業で意見をシェアした。FGMの問題を知っていた生徒はいなかった。小さな範囲でのアクションだが、クラスにいる人に働きかけることができ、すごく意味を感じた。彼らの中には、「今までこの事実があることは知らず、女性と男性の平等が実現してほしいと思っていたが、実際にそれが実現するのはとても難しいと感じた。」や、「男性からしても、この事実はショックなものであり、しかしそれが文化であるというのなら、周りがそれをやめさせるというのはかなり難しいのではないか。」などの意見があった。

このアクションプランを起こしてみても、普段はできない問題シェアをして考えを広げることができたように、自分が変えたいと思ったことに対して、まずどんなに小さいことでも、行動してみることが重要だと思った。

さらに、ジェンダー問題を考える時には、男性と女性両方が同じくらい問題を考えることができ初めて、平等というものが生まれると、この取り組みを通して実感した。

ジェンダーをテーマに考えたこと

木村 彩菜

白百合女子大学

私はジェンダー(性差別問題)をテーマにした。特に、女性たちの人生における選択に焦点をあてた。自分自身が大学生になってから、身の周りの環境が大きく変化し、様々な出会いがあったためである。そのことから、女性には人生の中でいくつかのイベントがあり、その都度、選び、考えながら様々な道が開けるのだと思うようになった。

ジェンダー(性差別問題)には、大きく2つに分かれる。1つ目は、先進国で起こるような性別によって制限を受けることである。例えば、希望している仕事を、性別を理由に断られる、などだ2つ目は、発展途上国で起こるような女性の権利が奪われていることである。例えば、結婚相手を選ぶ権利がない、などだ。

アクションプランを計画する上で重要視したのは、次の3つである。①小さな物事にも目を向ける②自分の意見・感じたものを人と共有する③新たな価値観や物の見方・考え方を自分

のものにしていくことである。また、ジェンダーの背景・原因には、社会、文化、歴史が深く関わっていて、それらが人間を作るのに大きな影響をもっていることも心に置いた。

実際のアクションプランは大学で同じフランス語のクラスメイトとクリスマスパーティーを開き、その一部を借りて企画した。話の中心になったのは、「将来への不安」であった。大学を卒業できるか、卒業後の進路、自分のやりたいことがどのくらい実現できるのか、他にも結婚や出産、仕事(を続けるか、仕事と結婚するか)などなど様々であった。企画が上手くいか心配していたが、同世代の私たちが話し合っ、だからこそ共感できることがたくさんあると分かった。

この機会を経て、親睦を深めることができ、悩みがあっても、みんなで共有しやすくなった。またそのことで、悩みが解決しやすくなり、様々な考え方や視点を得られやすくなったと思う。

アクションプランを実行した、クリスマスパーティーの様子



地域の食糧廃棄を減らす

浅場 理佳

宮城学院女子大学

私のアクションプランは、食糧廃棄をなくすための取り組みをすることです。なぜなら、世界には食糧不足で多くの人々が飢えている一方で、私たちは毎日大量の食料を廃棄しており、私たちはもっと食べ物を大切にしなければならないと考えたためだ。また、私は食料品店でアルバイトをしており、そこでもまだおいしく食べられる大量の食料を廃棄しなければならず、罪悪感を少しでもなくしたいと考えたからだ。

まず、普段棄ててしまう部分を利用したレシピの普及を考え、地元のスーパーに交渉したが、レシピを置くことはできないという回答だった。そのため、家で地道に廃棄部分を利用した調理を実践した。

また、アルバイト先では『エコ販売』を提案した。販売期限を過ぎても、おいしく食べられるものは20%あるいは30%引きで販売するというものだ。私が働き始めたときはそのような取り組みは行っておらず、販売期限を過ぎたものはすべて廃棄していた。それは、ごみ袋2つ分にな

ることもあった。エコ販売を始めてからは、廃棄量は以前と比較して30%以上減った。廃棄の商品がないという日もしばしばあった。さらに商品を安く売り廃棄量を減らすことによって、店の利益にもつながった。エコ販売を推進したことによって地域の食糧廃棄量を減らすという目標に確実に近づいたと考える。

食糧の問題は、格差や環境などの問題と関連している。もっとたくさんの人に世界で起きている問題を知ってもらいたいと思い、IVY youthという団体に所属し、そのための活動を行っている。この団体では特に子どもたちを対象に、世界で起きている問題を遊びながら学べるキャンプを企画している。これまで、水の問題、異常気象などを、たくさんのワークショップを行った。これらのキャンプを企画、実行していく中で、私自身も多くの知識を得た。世界の問題について知ってもらいたいという目標に少し近づけたと考える。

価値観や視野を広げることの大切さ

村端 友花
横浜 YMCA

私は今回、自分で企画立案したワークショップ(以下、WS)を開くことをゴールに定めた。その理由は高校時代に演劇部部長を務めていたり、今年の夏に第20回 AIDS 文化フォーラム in 横浜で WS(2 時間)のファシリテーターを経験していたので、自分の「好き・向いている」に合致していると思ったからだ。

しかし、実際に WS を開いてみると、子ども達がなかなか話を聞いてくれなかったり、他の遊びをしに行ってしまうたりで、私は子ども達に「聞いて～！！」と10回くらいは言ってしまった。WS を終えて正直、子ども達はつまらなかったかもしれないと思った。

AIDS 文化フォーラム in 横浜での WS は、興味がある大人の方が集まっていたので、真剣に話を聞いてくれるのが当たり前だと思っていた。今回の WS に向けて、例えば○×ゲームは絵を使って分かりやすくしたり、クッキーのもらえる数で世界の格差を表したりと自分達なりに

工夫はしたのだが、子ども達の反応は素直であった。大切なことは、受け取り手にも「楽しい、面白い、参加したい」の感情を作る事だと学んだ。

また今回、仲間集めから始め、テーマを決め、「何を伝えるか」「どうしたら上手く子ども達に伝わるか」を真剣に考え、なんとか WS を実現でき、とても良い経験になった。何個も伝えたいテーマがあったが、「世界の食料格差」と「日本の食料廃棄」問題に絞ったことも良かった点である。WS の終わりには、「僕のクッキーを貧しい人に贈ろう」と話にきてくれた男の子もいて、やってよかったなと思えた。

そして、2014 年3月には春季キャンプリーダーに挑戦することにした。リーダー経験を通じて、子ども達への接し方を学び、また世界の問題を伝える WS を開きたいと思っている。

(ユースボランティアリーダー)

横浜中央 YMCA 放課後児童クラブでのワークショップ風景



神戸女学院大学YMCAで街頭募金活動を根づかせる

川中 麻裕
神戸女学院大学

私のアクションプランは「神戸女学院大学YMCAで募金活動をする。」ことだ。このプロジェクトに参加して、沢山の人の活動を聞く機会があり、他のYMCAの活動の多様さ、と積極さに驚いた。自分たちでボランティアをしていこう！という前向きさを、私たち神戸女学院大学YMCAでも増やしたいと考えた。

まず出来る活動はないか…と考えた時に「街頭募金」が思い浮かんだ。全員で出来、かつ大きな声で街頭にいる人に思いを伝える事で自分たちのボランティアに対する思いをもう一度再確認する事が出来るのではと考えたからだ。

私は、日本YMCA同盟の山根一毅スタッフに協力をお願いし、神戸YMCAとコンタクトを取ることが出来た。神戸YMCAの永井道子ス

タッフに大学でYMCAの国際協力募金についてお話いただき、それから約半年間、毎月募金活動に参加している。

目標は達成しましたが、街頭募金を続けていくうちに、もっと沢山の人が「募金しよう」という気持ちから行動を起こすにはどうしたら良いだろうと考えている。そして、砂漠の中、450キロの道のりを7日間で走りぬく「世界一過酷」と言われているサハラマラソンへの参加を決断し、そこでチャリティーをしようと考えた。応援していただけたら心強い。

また、神戸女学院大学YMCAを更に活気づけ、神戸女学院大学＝ボランティア、国際交流が盛ん！と思われるように、どんどん自分たちでアクションしていきたいと思っている。

(学生YMCAメンバー)

夏期研修 6 日目、アクションプラン
を考える川中さん(右)



互いに影響を与える関係を育む-生涯の友に出会う-



Po Sovinda さん
カンボジアYMCA

Cambodia

カンボジアから参加したわたしたちにとって、今回の研修は実りある経験となった。様々な国の友人たちと出会えたこと、それぞれの国での生活・経験に基づいて多様な視点で話し合ったことが印象的である。一方向が受け取るのではなく、相互に理解する研修手法も魅力的

に感じた。

カンボジアYMCAは資金等のいくつかの困難を抱えてはいるが、このような機会に触れて「地球市民教育」という観点からプログラムを計画していきたい。

(ユース委員)

夏期研修は、とても有意義なものであった。アジアの仲間と対話する中で、彼らは、「このような日本での研修に参加できている私たちは、幸せだ」と口をそろえて言っていた。とても尊敬できた。私は、自主的にこの研修に参加したいと思い参加したが、彼らが日本で、この研修に参加してみたいと思っている、あの熱い姿勢に届いているかと自問した。

また、韓国のメンバーの一人は「もうすぐ、軍隊に入らなければならない」と教えてくれた。韓国で徴兵制度があることは知っていたが、同世代が考えているということに、とても衝撃を受け

た。制度についてどう思っているのか簡単に聞いてしまっただけではいけなかったとのちに反省したが、彼は、「そのような制度があることももっと知ってほしい」と教えてくれた。「軍隊に入ることは、複雑だけど、国を守るためにはそうするのが一番いいと思っている」そう伝えてくれた。軍隊に入らなくても、国を守る方法があるのでないか、それを考えよう、とは彼に伝えられなかったが、そのような方法を模索していくことは、重要であると思う。

(学生YMCAメンバー)



吉村 巴恵
広島女学院大学



Fatyさん
東ティモールYMCA

Timor-Leste

1週間のアクティビティーを通じて、世界や地域が共に抱える課題への「気づき」、大勢の人の前で話す「スピーチ力」、そしてYMCAに連なる同世代の若い友人との「一致」について学びました。世界にまたがる大きな問題について学んだ時間以上に、日々の共同生活の中でお互いを励まし、助け合った時間が強く印象に残

った。そして室内で考える時間以上に、フィールドワークで日本の街や地域に赴いて初めて知ったこと、吸収したことがたくさんあった。英語を立派に使いこなせなくても、表情をよく観察し、相手を理解しようという聴き手の姿勢から多くを学ぶことができた。(スタッフ)



渋谷 唯子
中央大学

地球市民育成プロジェクトで、初めて東ティモールの方と交流した。このプロジェクトで、途上国の貧困や環境問題、経済格差の問題を解決したいという人たちと多く出会った。私もそのうちの一人で、貧困問題を解決したいと考えていた。

ある話し合いで、東ティモールの方から「多くの方が貧困や環境問題を解決したいと言うが、誰がこうした状況を作り上げているのだろう」と

いう発言を聞いた。私は、貧困問題を考えるにあたって貧困地域の現在の状況しか見ておらず、その地域の歴史を知らないこと、また支援を受ける人がどう思うのかを考えていないこと、アジアの一つである日本がアジア諸国の歴史をよく知らないことに気づかされた。

(学生YMCAメンバー)

▼夏期研修派遣者数の推移

	2009	2010	2012	2013
中国	9	0	0	0
香港	5	3	7	3
韓国	0	9	10	6
台湾	5	5	12	6
マカオ	0	2	2	0
PSG	-	-	-	8

*PSG はパートナーシップ・サポート・グループの略。日本をはじめ、アジア太平洋地域のYMCAが協力して、PSG対象国へのリソース(財政、リーダーシップ、プログラム開発など)の提供やサポートを行っている。カンボジア、東ティモール、インドネシア、ベトナムの4か国から招待した。

Indonesia



Yudih Satria Pulo さん
マッカサルYMCA

私の所属するマッカサルYMCA(インドネシアスラウェシ島)では、「ハンセン病と差別」について考えるプログラムをもっています。ハンセン病元患者の人々とその家族とが地域の人々から疎外されてき

た・いることを学んでいる。今回の研修のフィールドワークで、神山復姓園記念館(静岡県御殿場市)を訪れたことが印象に残った。自分が日本で目にしたこと、感じたことを伝え、インドネシアのYMCAで活動を共にする仲間の輪を広げてゆきたい。(委員)

Vietnam



Tran Truc Anh さん
ベトナムYMCA

「理解する」ことの真の意味を考える機会となった。夏期研修では思いやりをもって互いの話に耳を傾け、分かり合うために柔軟な思考で考え、時にはこれまで自分が培ってきた価値観を離れて受け入れる勇気も必要

だった。このような研修は若い参加者たちの内側から沢山のアイデアやエネルギー、そして「自分には力が備わっている」ということを思い起こさせる機会であると強く認識した。将来的には、ベトナムYMCAでもこのような研修をつくりたい。(スタッフ)

大内 あおい
清泉女子大学

夏期合宿では同じ問題意識を持つ近い年代の研修生と出会い、研修内容はもちろんですが、彼らの存在がわたしの価値観を大きく変えてくれた。

同じホームグループで、中国出身の広島YMCAスタッフの郭さんと話しをする機会があった。ニュースでしか知らなかった反日感情の理由には中国の徹底された情報規制があること、知る術がないから目の前の情報しか信じられないことがあると聞いた。この点は日本でも同じようだと思った。ニュースでは現地の日本企業が攻撃されるシーンを連日流し、あたかもそれ

が毎日行われているように感じさせる報道がある。そのことが、中国に対する嫌悪感を高めているからだ。

郭さんはこう言ってくれました。「わたしは日本に来て、たくさんの良い日本人に出会った。わたしたちはもっと直接触れ合ってお互いを知るべきだ」と。郭さんと話すことで考え方が変わりました。

今のわたしは、国民性よりも、一人ひとりを見る姿勢を大切にしたいと考えている。



一年をふりかえって、今感じていること

若い力は社会を変えられる。

星 美紀
(清泉女子大学 YMCA)

考え続ける粘り強さが養われた。

妹尾真宏
(上智大学)

多くの仲間に出会い、関わりを持てた
ことが自分の成長につながった。

高彰希
(立教大学 YMCA)

国内と国外の問題のつながりを
考えるようになった。

宋はるか
(中央大学 YMCA)

もっと積極的に世界へ行き、
見て感じていきたい。

諸隈玲奈
(広島女学院大学 YMCA)

長期的なビジョンをもって行動し続け
ることが大切だと気づいた。

山形泉
(立教大学大学院)

真摯な行動は他人に影響を与えら
れると確信した。

田村友梨
(大妻女子大学)

近隣諸国との歴史を学ぶこと、異文
化を受容する寛容さを身につけたい。

中美由紀
(広島女学院大学 YMCA)

一歩踏み出して地域活動に参加し、
地域の素晴らしさを再発見している。

矢木田阿美
(北九州 YMCA)

被災地のこと、同世代が抱える問題
をもっと学んでいかなくてはと思っている。

石垣奈那子
(中央大学 YMCA)

YMCAに集うすべての子どもたちが
世界の問題に興味をもてるように
取り組んでいきたい。

渡辺泰江
(広島 YMCA)

物事を知る際、多角的な視点を持
ち、疑問を抱くことが必要であることを
学ぶことができた。

金沢美咲
(和歌山 YMCA)

2013 年度報告会、認証授与式

日程：2014 年 3 月 23 日

場所：在日本韓国 YMCA 9F ホール



研修生アクションプラン報告から一部紹介



洪偉軒さん

YMCA健康福祉専門学校(横浜YMCA)

YMCAで日本語を学ぶ台湾の留学生として研修に参加しました。多くの留学生は来日前、「たくさんの日本人の友人ができる」「アルバイトをして基本的な生活ができる」「日本語が上達する」と期待をしています。しかし、経済状況によって、学校以外はアルバイトをせざるを得ない、夜勤の工場仕事をやらざるを得ない、こうした現状の留学生も多くいます。同じ留学生として、「色々な日本を見せたい」、そのために日本人や留学生同士が交流する機会を作る活動を行いました。

認証生へのメッセージ



近藤麻衣さん

YMCA地球市民育成プロジェクト第1期生、大阪YMCA職員

2009年にこのプロジェクトに参加して、“Think Globally, Act Locally”を体現していきたいと思いました。YMCAの職員として働く傍ら、野宿者を見守る夜まわりや貧困地域のこどもたちへのボランティア、イラクのこどもを救う会での活動を始めました。継続して“アクション”し続けることで、より深く地域や社会の課題が見えるようになり、また自分の居場所も増えました。ボランティアでできた繋がりを仕事に生かすこともでき、大きな成果です。

第4期YMCA地球市民認証を受ける皆さん、地域や世界に目を向けて、自分の歩みを続けてください。きっと、活躍の幅が広がるはずですよ。

2013年度は52名の若者たちがYMCA地球市民認証を受けました。

ご支援・ご協力いただいている皆様に感謝申し上げます。

資料編

2009年度-2013年度参加者分布と人数内訳

北海道・東北エリア

■大学・学生YMCA

北海道大学YMCA(2)東北学院大学(1)宮城学院女子大学(1)

■都市YMCA

北海道YMCA(10)仙台YMCA(1)

関東・中部エリア

■大学・学生YMCA

一橋大学YMCA(1)中央大学YMCA(13)立教大学YMCA(3)清泉女子大学YMCA(8)フェリス女学院大学(1)白百合女子大学(1)聖心女子大学(1)上智大学短期大学部(2)上智大学(2)立教大学大学院(1)横浜市立大学(1)大妻女子大学(1)東京農業大学(1)金沢星稜大学(1)金城学院大学(1)

■都市YMCA

とちぎYMCA(1)千葉YMCA(1)東京YMCA(4)横浜YMCA(4)山梨YMCA(1)富山YMCA(2)名古屋YMCA(4)国際青少年センター東山荘(1)

■その他

日本赤十字社(1)

関西・中国・四国エリア

■大学・学生YMCA

京都大学YMCA(5)関西学院大学神戸三田キャンパスYMCA(7)関西学院大学(2)京都女子大学(1)神戸女学院大学YMCA(8)広島女学院大学YMCA(5)同志社大学SCA(2)同志社大学(1)甲南大学(1)

■都市YMCA

京都YMCA(7)大阪YMCA(3)和歌山YMCA(3)神戸YMCA(1)姫路YMCA(1)YMCAせとうち(9)広島YMCA(5)

九州・沖縄エリア

■大学・学生YMCA

長崎純心大学(1)九州ルーテル学院大学(1)熊本大学(1)

■都市YMCA

北九州YMCA(1)熊本YMCA(4)

2013 年度夏期研修の様子

日程：2013 年 8 月 29 日 - 9 月 4 日

場所：日本 YMCA 同盟 国際青少年センター 東山荘

スケジュール

- Day 1 ・国内研修生オリエンテーション
- Day 2 ・ワークショップⅠ～世界がもし100人の村だったら～
・ウェルカムナイト
- Day 3 ・フィールドワーク
- Day 4 ・ワークショップⅡ～新・貿易ゲーム～
・グループディスカッション
- Day 5 ・ワークショップⅢ～表現しようメディア・リテラシー～
・富士山ネイチャープログラム
- Day 6 ・アクションプラン(行動宣言)
・カルチャーナイト(文化交流)
- Day 7 ・ふりかえり
・Philosophy for Global Citizen～私が考える地球市民～

Day 1

国内研修生のオリエンテーション

一人ひとりが参加する意識、リーダーシップが発揮できる環境づくりのために。

「はじめてYMCAの活動に参加するため期待と不安が混じっている」、「1週間でどんなことを学びたいのか」、それぞれの想いをまずは国内研修生同士で共有します。

加えて、ホスト国/YMCAとして、海外メンバーの「おもてなし」やプログラム進行、情報発信など色々な役割に分かれて準備をします。

また、一週間の宿泊・研修会場である東山荘の見学も実施しています。



チューター制

これまでにYMCA地球市民認証を受けた者たちが「チューター」として、夏期研修中はもちろん、年間研修をサポートします。



少人数制

夏期研修中は、国内外のメンバー6~7人/1グループを設けています。じっくり、安心して話せる関係性を大切にしています。また、そのグループを「ホームグループ」と呼んでいます。



多様性の中で学ぶ

海外のYMCAで活動する大学生に加え、平和構築や教育支援の最前線で働くスタッフが集います。また、様々なバックグラウンドをもつ講師と出会い、学べるのが特徴です。



Day 2

ワークショップ I ～世界がもし100人の村だったら～

世界が抱える問題を疑似体験。問題の背景にはどんな原因があるのか考えよう。

世界の「ある人」になって、様々な尺度（文化、民族、性別、年齢、経済指数など）において置かれている状況を学ぶ体験型ワークショップを行っています。

特に「経済格差」の現状を知ることや、自分に与えられた「ある人」の背景や現状を想像し、思考し、言葉にしていく力を養うことを目的としています。



使用教材:新・ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」
(2003年、特定非営利活動法人開発教育協会/DEAR発行)

キリスト教の学び

YMCAはキリスト教の精神を大切に活動し、開会や閉会、一日の始まりに礼拝を行っています。広島女学院大学の澤村雅史チャプレンがコーディネーターを務めています。



ウェルカムナイト

立食形式の食事や、ゲームを楽しみながら一週間の研修に向けて、互いに打ち解けあう時間を過ごします。



スタッフミーティング

各国の引率スタッフ、チューターやリーダーが集まり実施しています。進み具合や、研修をより良くするため意見を出し合います。1時間以上に及ぶこともあります。



Day 3

フィールドワーク

地域の「現場」を訪問。当事者の声を聞く、問題の構造を確かめる、初めて気づくことがある。



グループに分かれて、東京、横浜、静岡それぞれの地域へ訪問します。地域が抱える課題や歴史を学び、それらに対する市民活動について知見を広めます。

また、それら地域の課題がどの様に世界とつながっているのか、相互に影響を与え合っているのか考える視点を養っていきます。

東アジアの平和

昨今、領土問題、ヘイトスピーチ、歴史認識の違いなど、中国、韓国、日本には緊迫した課題があります。アジア地域で草の根の交流を続けてきたYMCAは、これらの課題をどの様に考え、働きかけていけるか探っていきます。

訪問先：靖国神社遊就館 / 在日本韓国YMCA他



人権を考える

ハンセン病の歴史を学ぶ記念館を訪れ、元患者の方へインタビューを行うことから、差別や偏見への洞察を深めます。また、御殿場地域は水など天然資源が豊富です。飲料メーカーの工場を訪れ、品質管理や環境への取り組みを学びます。

神山復生病院復生記念館 / ヤクルト工場 / 富岳風穴他



YMCAの活動を知る

横浜YMCAが行っている活動から学びます。日本では外国人が住まいを借りる時、様々な困難があります法的な相談に加え、日本独自の文化から起きるトラブルの予防などサポートを行っています。また、AIDS予防啓発への取り組みを学びます。

かながわ外国人すまいサポートセンター / AIDS市民活動センター他



Day 4

ワークショップⅡ～新・貿易ゲーム～

グループ/全体ディスカッション



ゲームを通じて、世界貿易の仕組みや問題点を学ぶワークショップです。

グループごとに首相(大統領)、外務大臣、産業大臣、政策大臣、市民などのプレイヤーになり、与えられたルールに沿って国内生産量を競います。

ゲームの後は、国際競争力、新自由主義、産業廃棄物、資源争い、外国人労働者をめぐる政策、豊かさとは何か、国益と公共益のジレンマなど多角的な視点で、ふりかえりを行っていきます。

国内研修生対象

ふりかえりセッション

チューターが進行役となり、日本語でふりかえりの時間をもちます。ホームグループを離れて、新しいグループに分かれて実施しました。研修中盤に入り、感じていること、成長したと思うこと、不安に思っていることなど互いに思いの丈を打ち明けます。



意見例)・シンプルな英語で沢山話す ・失敗を恐れない事 ・複眼的に見る
・同じ関心を持つものが集まれば集まるほど、大きな力になる！

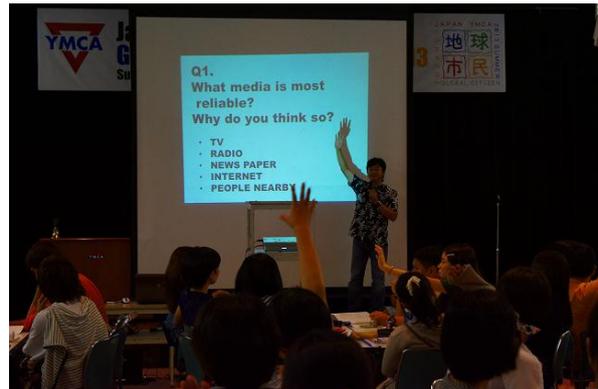
Day 5

ワークショップⅢ～表現しようメディア・リテラシー～

私たちは視覚から多くの影響を受けて生活しています。情報を批判的に読み解く力をつけよう。

新聞、雑誌、テレビ、インターネットなど、様々な「メディア(媒体)」を通じて情報を得ています。切り取り方によって、内容は大きく変わってくることを様々な事例をもとに学んでいきます。出来事の「深層」や「真実」を分析できる批判的思考力を鍛えていきます。

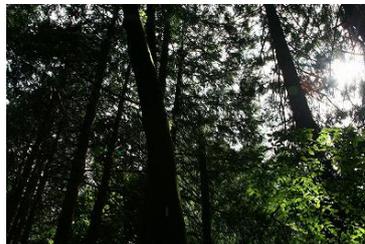
講義に加え、研修生の意見を聞きながら参加型で進められることが特徴。



「信頼できるメディアは？」という質問にテレビ、SNS、LINE等様々な意見が出される

ネイチャープログラム

経験ある東山荘のスタッフがガイドを務めるリフレッシュするプログラム。東山荘横を流ながれる寒沢をジャブジャブ歩いて、滝たきに打うたれたり、丸太で川を越えたり、水を飲んでみたり、源流を訪たずねます。



Day 6

アクションプラン/行動宣言

このプロジェクトでは、学んだことを地域や大学に持ち帰って積極的に仲間に広めたり、自分の地域で活動をはじめ「アクションプラン(行動宣言)」を立案します。



カルチャーナイト

最終日の晩、カルチャーナイト(文化交流会)を行っています。民族衣装や伝統的なコスチュームや、踊り、食べ物、若者の間で流行している事柄について紹介しています。



Day 7

帰路へ/別れの時



それぞれのアクションプランを実行する、再会の日を約束するなど、1週間で力をつけた経験、培った友情を得て帰路につく。

宿泊施設

国際青少年センター
東山荘(とうざんそう)

2015年、東山荘は
創立100周年を
迎えます

〒412-0024
静岡県御殿場市東山 1052
Tel 0550-83-1133
Fax 0550-83-1138
tozanso@ymcajapan.org



Sexual Harassment Policy and Procedures

セクシャル・ハラスメント防止のためのガイドラインの配布

夏期研修で、さまざまな文化的社会的背景をもつ一人ひとりが安心して学べるようにガイドラインの配布と相談窓口のお知らせを行っています。

また、社会が抱える課題の一つであるセクシャル・ハラスメントの考え方を共有し、すべての人権が尊重される環境づくりに真剣に取り組む人を育てる目的です。

Y M C A 地球市民育成プロジェクト リソースパーソン

五十音順・敬称略
2013年4月1日現在

浅羽 俊一郎

国連UNHCR(国連難民高等弁務官事務所・日本委員会)協会評議員(東京YMCA会員)

岩坂 二規

関西学院大学教育学部教員(学生YMCA顧問・大阪YMCA会員)

大森 佐和

国際基督教大学教養学部教員(学生YMCA会員・日本YMCA同盟委員)

上條 直美

立教大学異文化コミュニケーション研究科教員(YMCA農村青年塾委員)

澤村 雅史

広島女学院大学国際教養学部教員(広島YMCA会員)

田中 治彦

上智大学総合人間科学部教員、(特活)開発教育協会/DEAR評議員

長尾 ひろみ

広島女学院大学学長(世界YMCA同盟委員)

廣瀬 頼子

奈良教育大学学校教育講座教員(神戸YMCA委員・アジア・太平洋YMCA同盟委員)

真崎 克彦

甲南大学マネジメント創造学部教員(日本YMCA同盟協力者)

松井 ケティ

清泉女子大学文学部地球市民学科教員(日本YMCA同盟協力者)

村瀬 義史

関西学院大学総合政策学部教員(学生YMCA会員)

山本 俊正

関西学院大学商学部教員(日本YMCA同盟委員)

湯本 浩之

宇都宮大学留学生・国際交流センター教員、(特活)開発教育協会/DEAR副代表理事

中村 絵乃

(特活)開発教育協会/DEAR事務局長

Y M C A 地球市民育成プロジェクト協力・支援者メッセージ



北城 恪太郎さん

国際基督教大学理事、日本アイ・ビー・エム株式会社相談役
YMCAユースファンド副代表幹事

YMCA地球市民育成プロジェクトに参加された皆さんの報告を聞いて、本当に良い経験をされたと分かり大変嬉しい。

社会には本当に沢山の問題があります。見過ごしたり、誰かが解決してくれるだろう、というのではなく、自分から問題を解決しよう、まず自分のできることから一步一步取り組もうという気持ちから出てきた行動は素晴らしいと思いました。

「何かを成し遂げたい」と夢を持って取り組むことはとても貴重なことであります。一方で、その夢は実現できないかもしれないけれども一步一步ずつ進んでいくことが大切で、前向きに挑戦しつづけてほしい。そうすれば必ず新しい道が拓けると思います。

夢にまつわる「ある兄弟」の話

「DREAM IS NOWHERE(夢はどこにもない)」と書かれた壁があった。その壁を見た兄弟の一人は夢を持たずに生活をした。もう一人は「DEARM IS NOW/HERE(夢はいま、ここにある)」と読んだ。それから色々な事に挑戦して、人生を豊かに生きた。ものの見方1つで、人生は大きく変わるかもしれない。



中川 善博さん

公益財団法人日本YMCA同盟会長

第4期認証を受けた皆さんにお祝い申し上げます。また、地球市民で得た経験をどの様に生かしていくのか、これからの活動にも期待をしています。皆さん一人ひとりのこれからの未来に、この言葉を贈ります。

「Change Ourselves; Change Community (コミュニティーを変革するため、まず、自分の生き方を変えよう)」

協力 特定非営利活動法人 開発教育協会/DEAR
プロジェクト企画・準備、夏期研修についてご協力いただいています。

支援 YMCAユースファンド

ワイズメンズクラブ国際協会東西日本区

公益財団法人倶進会

尊いお支えに心から感謝申し上げます。

YMCA地球市民育成プロジェクト 2013 年度報告書

発行日 2014 年 5 月 31 日

連絡先 公益財団法人日本YMCA同盟

〒160-0003 東京都新宿区本塩町 7 番地

Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641

Email info@ymcajapan.org URL <http://www.ymcajapan.org/>

本書の無断転載・複製はお断りします。

本報告書は公益財団法人倶進会からの助成にて作成いたしました。